興照寺報

平成26年7月
54号

発行　浄土真宗　興　照　寺
〒890-0045　鹿児島市武一丁目25番12号
電話 099-254-3269 (代)FAX 099-254-0303

一面　還暦を迎えた心境
二面　西本願寺新ご門主継承法要お話
　　本堂等壁面修理塗装、室内改修のご報告
三面　春季彼岸、永代経のお話
四面　秋季彼岸、永代経、報恩講のご案内
　　お盆について　等　お知らせ

五月に本堂等の壁面修理、塗装をおこないました。

還暦を迎えた心境

今年還暦を迎えました。当初、実感が湧きませんでした。自分の中で「まだまだ若いと思っている」「歳を取りたくない気持ちが強い」「年寄り扱いされたくない」そんな思いが強かったからだと思います。

六十歳、周りの友人たちの多くは定年を迎えようとしています。長年勤めた仕事場を去り、新たな人生のスタートを切る準備をしています。まさに人生の大きな転機を迎えています。寺に住まう私には定年制がありません。還暦を迎えても特別変化のない毎日を過ごしている私。でも近頃、還暦を老年期に入っていく節目として、「こびっと（しっかり）」大切に受け止めていこうと思い直しています。

先日、新聞の広告欄の「男六十代　老いに抗（あらが）うか、受け入れるか」という文字が目に入りました。お釈迦様は、人生は苦であり無常であると示され、避けることのできない人生の大きな苦しみ〈生老病死〉をしっかり受け止めていく生き方を説かれました。

親の介護を通して老い行く姿を直接見てきました。半年前から新たな介護も始まりました。その体験を基にしながら、老いを素直に受け入れていきたい。今そんな心境です。

六月六日に西本願寺ご門主の継職法要がありました。第二十五代のご門主は昭和五十二年生まれの釈専如（せんにょ）大谷光淳（おおたにこうじゅん）という方です。

当寺と西本願寺は直接関係はありませんが、新しい西本願寺ご門主の姿勢は浄土真宗のこれからにとって大きなものがあるかと思います。

以下、法要の際のお話を載せていただきます。

なお、お言葉の中の「自信教人信」は平成二十四年に作りました親鸞聖人像の銘と同じです。

本願寺第二十四代即如門主の退任に伴い、本願寺住職・浄土真宗本願寺派門主に就任いたしました。今日まで浄土真宗のみ教えを受け継いでこられた先人の方に感謝し、次の世代へと伝えることができるよう、皆さまと共に努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、親鸞聖人が説かれた浄土真宗の教えは、主著『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』に「もしは行、もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心（しょうじょうがんしん）の回向成就（えこうじょうじゅ）したまふところにあらざることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなり」と示されているように、阿弥陀さまのはたらきによってこの私たちが救われるという教えであります。なぜなら、私たちの真実の姿、ありのままの姿とは、自己中心的な姿だからであります。そのことに真正面から向き合い、この限られた命を生きていくのが浄土真宗の教えを依りどころとする者の生き方でありましょう。それは、いつの時代であっても、またどの場所であっても変わることはありません。

しかし、今日の社会状況において、今までと同じように教えを次世代へと伝えることが困難になっています。また、仏教や浄土真宗の教え、親鸞聖人に対する関心はあっても、お寺とのご縁がない方も多くおられます。多くの方にお寺へお参りいただけるような取り組み、教えを伝えていく工夫が必要です。

それぞれの地域の実情に合わせた、各寺院、僧侶、寺族、門信徒一人一人の活動が重要になります。親鸞聖人は、道綽禅師（どうしゃくぜんじ）の「前（さき）に生（うま）れんものは後（のち）を導き、後に生れんひとは前を訪（とぶら）へ」という文章を『教行信証』の最後に引用されています。浄土真宗の教えが広く伝わるよう、努めなければなりません。

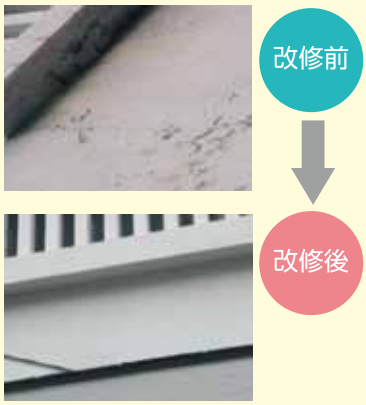
そして、阿弥陀さまのはたらきを聞かせていただく私たちは、他の方の悲しみや苦しみに無関心ではいられません。自分さえよければよい、という考え方は、親鸞聖人とは相（あい）いれません。宗門の社会への取り組みも必要です。

善導大師（ぜんどうだいし）の「自信教人信（じしんきょうにんしん）」というお言葉をあらためてわが身のこととして受け止め、南無阿弥陀仏とお念仏申しながら、浄土真宗のみ教えを喜ぶ宗門の一員として、実践運動に取り組んでまいりましょう。

本願寺新報平成二十六年六月十日号より掲載（一部割愛）

五月に新館を除く建物の外壁の修理塗装を行いました。長いあいだ手を付けずにいましたので、修理個所も多く大工事になりましたがおかげで綺麗になりました。

また、室内の一部改修も行いました。本堂に一部段差がありましたが全てフラットになり、使い易くなった事と思います。



春季彼岸法要

講師　原中　秀峯　先生

お彼岸というのは、この迷いの世界から彼の岸に到る「到彼岸」。彼の岸、すなわちお浄土に参らせていただくというのがお彼岸です。

皆さんも私もお浄土に参らせていただきます。では、どうやって参らせていただくかといいますと、お正信偈に「帰命無量寿如来　南無不可思議光」と、親鸞聖人は阿弥陀さまのお救いを説いてくださいましたが、そのお正信偈の途中に「極重悪人唯称仏」、（ただ仏の名を称えなさい。南無阿弥陀仏といただきなさい。）と示されています。

南無阿弥陀仏と称えると必ずお浄土に蓮の花が開き、還る場所が定まります。ありがたいですね。

ところが私たちの毎日は、お浄土に向かうような日暮しではありません。お浄土さまに背な向けて、「欲も多く怒り腹立ち嫉み妬む心多く暇なくして臨終の一念に至るまで止まらず消えず絶えず」の毎日です。煩悩に溺れ、「来なさい」「掴め」と言われてもできない私たちを、だからこそ私の方から飛び込んで救おうと言われるのが阿弥陀さまという仏さまです。

吉田松陰先生が「親思う心にまさる親心けふのおとずれ何ときくらん」という詩を残されています。人間世界、親の方が子を心配して手を合わせるものですね。「親」という漢字がありますが、「木」の上に「立」っては「見」ちゃおれんというのが親のありかたです。車の多い通りによちよち歩きの子供が飛び出したら、あぶない！と飛んで行きましょう。こっちが頼まんでも、親の方はいつも心配してくれているのです。「親」という漢字には「近づいてひっつく」という意味もあります。お浄土から皆さまの姿を見た時に、見ちゃおれん！といつも先回りして「落とさんぞ」と私から片時も離れない（恒順衆生）のが阿弥陀さま、南無阿弥陀仏の仏さまです。

阿弥陀さまと同じ悟りを得て仏さまになられたご先祖さま方も、皆さんが手を合わせるより先に「幸せに暮らしてください、いつか娑婆の縁が尽きる時が来ます、その時は彼の岸『彼岸』の世界で逢いましょう」と両手を合わせてくださっているのです。

お彼岸とは、なかなか手を合わせお念仏申せない「この私」が、南無阿弥陀仏と一声を申してお浄土さまの蓮を花開かせ、お浄土さまに参らせていただくご縁なのです。

（要旨）

春季永代経法要

講師　藤谷　賢一　先生（姶良市）

浄土真宗は祈りの宗教ではありません。「聞の宗教」であります。そのことをお釈迦さまは無量寿経に於いて〝聞其名号　信心歓喜〟と説かれ、親鸞聖人は一念多念文意に〝本願の名号をきくとのたまへるなり、きくといふは本願をききてうたがふこころなきを聞といふなり、またきくといふは信心をあらわす御のりなり〟と戴かれています。また〝衆生、仏願の生起本末を聞いて〟いくことを肝要とされています。

さて、仏願の生起本末とは如何なるものかといいますと、阿弥陀さまがまだ法蔵菩薩と名のられて修業の身で在られた時、悩み苦しんでいる私共をご覧になって、一切の衆生を何の条件もなく皆平等に救いたい。もし救うことが出来なかったなら私は仏に成ることはないであろうと誓われ、五劫という長い間考えられて、四十八の願いを建てられました。そして、永劫というこれまた長い間修行ご苦労されて願いを悉く成就されて阿弥陀仏と成られたことをいいます。その阿弥陀仏の名のりが、〝南無阿弥陀仏〟（阿弥陀仏、私をたよれ、まかせよ、）の名号となってこの私のもとに行き届いて下さっているのです。つまり今、多くのご縁（お釈迦さま、七高祖、親鸞さま、ご先祖、ご同行）を頂いてお念仏が私に届いていると言うことはそのまま、一切の衆生を何の条件もなく皆平等に救いたい、救いとる準備も、方法もすべて調えてあるから、どうかあなたはあなたそのまんまをまかせてくれよ、の呼び声となって私の耳にすでに至って下さっているのです。お念仏は〝唯〟のお救いであります。こちら側に一切の条件も付けない、いただくのみの御みのりであります。すべて阿弥陀さまのお働きであります。そのお働きがわたしのもとへ届いてくださって〝南無阿弥陀仏〟とお念仏となって私の口から出てくださるのが称名念仏といわれるものです。あるご同行が、〝耳から六字の種を蒔き、胸には六字の花が咲き、花のかおりが口から出〟と必ず救うのお念仏の有難さを味合われています。口から香りの六字のお念仏が出てくださって初めて称名念仏が完結しそれからは〝報恩感謝のお念仏〟といただき、どこまでも至らぬ私に大安心の日暮しをと、阿弥陀様はどこまでもいつまでも働き続けて下さるのです。

秋季彼岸会法要のご案内

・期日（○のある日時にあります）

九月	午前	午後
二十日(土)	○	○
二十一日(日)	○	吹上
二十二日(月)	吹上	
二十三日(火) お中日	○	○

・時間　午前十時より
　午後二時より
・講師　篠部　洪紀先生（島根県）

秋季永代経法要のご案内

・期日　十月　十八日（土）
　十九日（日）
・時間　朝席　十時より
　昼席　二時より
・講師　田中　法文先生（福岡県）

※永代経志納のお勤めは、十九日昼席に行います。まだ永代経をあげておられない方は、寺へお問い合わせください。

永代経について

浄土真宗のみ教えが「子々孫々永代にわたって伝えられてゆくように」という願いを込めて営まれるのが永代経法要です。

み教えを伝えて下さったご先祖の遺徳を偲び、何より私自身が聞法に励んで、慶びを子孫に伝えていく。これこそが永代経法要の大きな意義です。

報恩講のご案内

・日　十一月二十三日（日）
・時間　朝九時半より　と
　昼席二時より
・講師　田中　誠證先生（大分県）

花まつり・和順会総会

四月六日に本堂で催されました。帰敬式を行い、その後踊りなどが披露されました。

「和順会」払戻しのご案内

満会となります和順会の払戻しを八月一日（金）に行います。会員の皆様には改めてご通知いたします。

「和順会」会員募集のお願い

当寺には「和順会」という五十年を超える長い歴史をもつご門徒の方々の会があり、八月より新年度が始まります。できる限り多くの方に入会していただき寺に親しんでいただきますようご案内いたします。詳しくは寺へお問い合わせください。

納骨堂募集

古い納骨壇にも空きが出ました。ご希望の方が居られましたらご連絡ください。

お盆参りについて

本年も門徒会費納入時にお聞きしましたご希望をもとに盆参りをいたします。

初盆や寺での読経を希望された方にはその日時などを書いたものを同封してありますのでお読みください。

※寺での盆参りの時間が昨年と違います。ご注意ください。

また、ご自宅への盆参りを希望された方は、ほぼ例年と同じ日にお参りする予定ですが時間はお約束できませんのでご了承ください。

お盆中の納骨堂のお参りについて お知らせとお願い

八月の十三日より十五日までは閉館時間を午後九時にいたします。

午前九時半頃より午後三時前までは寺での法要と重なり駐車場が混雑します。車でのお参りは避けられた方が良いかと思います。

また、長時間の駐車もご遠慮ください。

六月燈休止のお知らせ

本年より諸般事情により六月燈を休止する事になりました。長年のご協力に感謝いたします。

門徒会費・納骨堂管理費 納入のお願い

今年度門徒会費等が未納の方がおられます。ご確認のうえ、納入をお願いいたします。

寺役員人事報告（順不同・敬称略）

・**責任役員再任**　鳥丸政亮、久永泰、馬場節也、田原秀子
・**総代再任**　永家俊三、福留積治、村田隆、吉永成雄、馬場正蔵、久永修平、瀬川英清
・**監事新任**　丸山賢治
・**総代退任**　原園三郎

あとがき

梅雨の時期、鬱陶しい日が続きます。昔から何か無いと梅雨は明けないと言われます。何も無いに越したことはありませんが、今でも言われ続けると言う事は、それだけ自然の力が計り知れないという事でしょう。自分の力に自惚れるのではなく、自然の中に生かされていくことが大事なのではないでしょうか。

『自然法而』（じねんほうに）